

百歳への道なり

岩見沢市医師会
くびどクリニック

後藤 康之

最近、人生百年時代の声がかかりはじめてきた。しかも間もなく百歳に達しようかというにもかかわらず、それぞれの分野で変わらぬ活動を続けている人たちが取り上げられている。私の周囲にも、いわばその候補者ともいべき方が何人か居られる。その中のお一人が、音楽家の坂本博士氏87歳である。つい先日、楽壇生活65周年記念コンサートを終えたばかりである。

1961年に私は東京虎の門病院でインターン生活を送っていた。その折に住んでいたのは、世田谷区三宿という、その頃はまだ閑静な住宅街にあったアパートであった。住み始めて1ヵ月余りも経った頃であろうか。日曜日の朝早く洗面所で洗濯をしながら、好天気でもあり、つい大声を出して“カーロミオベン…”などと歌っていた。と、そのうちに広い庭を挟んだ隣の家から、素晴らしいバリトンが聞こえてきた。そこでこちらも負けじとばかり声を張り上げて…。そんなことが2～3度あったかと思う。しばらくして、その家の表札を見ると「坂本」とだけ書かれていた。

その後、さらにいくばくかの日が過ぎ、たまたま見ていたテレビからあの声が聞こえてきた。ミュージカルの番組であり、出演者の名前に坂本博士とあった。あれ！ プロなんだと少なからず愕然とした。えらいことをしてしまったかなと思ったが、こちらの顔や名前を知られているわけではなしと、そのまま時が経った。

話は急に50年余り進む。先に述べたおおよそのことを高校の合唱団のOB会報に載せたところ、東京在住のOBの一人が、坂本先生が主宰する合唱教室に加わっていたために、先生にその記事をお見せしたのであった。先生は昔の出来事を覚えておられ、大変に懐かしがっておられたとのことであった。そしてたくさんのご自身の作曲した楽譜やCDと一緒に、色紙を頂いた。聞くところによると、ご家族や周囲の人たちにも触れ回られたという。その翌年、60周年記念リサイタルが東京の浜離宮朝日ホールにて開催され、招待券が届けられた。

その日は12月初めにしては比較的暖かく、新橋よりゆっくり歩いて会場を目指した。ホールのロビーには、過去のいくつかのステージを紹介するパネルが並べられており、伊藤京子、草笛光子、ベギー葉山、佐藤しのぶ氏らと協演の写真が人目を引いていた。

プログラムには、多くの著名人よりお祝いのメッ

セージが寄せられていた。その中には、音楽にも造詣が深い故日野原先生のものも見られた。「歌が歌えてピアノが弾けて、指揮も作曲もできる坂本先生は我々の誇りであり、私は今度生まれ変わったらそのような音楽家になりたい…」とあった。当夜の聴衆の多くが同じ想いを抱いたに相違いない。もちろん叶わぬ夢であろうとも。

最後に挨拶に立たれた先生は大変に上機嫌であり、ぜひ65周年のリサイタルをとの決心を披露して、盛大な拍手を受けていた。

ところでその2年後に、サカモト・ミュージック・スクールのコンサートがあった。坂本先生が校長を務めるスクールには、声楽科、合唱科、ピアノ科のほかに、フルート科、ヴァイオリン科、聴音・ソルフェージュ科、さらにはクラシックバレエ科もあり、3歳から70歳過ぎまで100名以上が在籍している。そのほとんどと講師陣により、盛大なステージが繰り広げられた。先生は自身は演奏されず、総監督・構成・演出および合唱の指揮を担当された。このようにその後も毎年のように音楽活動を続けられた。こうして先に述べたように、今回の65周年記念コンサートに至ったのである。

このたびも自身が作詞作曲をした歌曲をはじめとし、懐かしい「ウィーンのしらべにのせて」、それに「ミュージカル ラ・マンチャの男より」の何曲かが選ばれた。いつものごとく盛大な拍手を受けた先生は、それとははつきり申されなかったと思うが、さらに5年後を考えられておられるようであり、ファンの方々もそれを心待ちにしているように感じられた。

5年後には先生は92歳となるはず。そして私は87歳である。何とかして先生の後を追って年を重ねてゆきたいものである。だが100歳を目指すには私にとっては至難と思われる。ずっとずっと年少の頃よりの心身の条件、そして覚悟も必要なのではあるまいか。

最近の新聞欄の投稿句より、『百歳を目指す決す七五三』 読売歌壇俳壇（平成30年12月11日）

